
源氏＜寮＞物語 ～少女(おとめ)の章

みなと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

源氏<寮>物語 〈少女の章おとめ

【Nコード】

N 8 2 3 1 0

【作者名】

みなと

【あらすじ】

なぜか変人ばかりが集まる、男女混合学生寮「源氏寮」を舞台とした青春コメディ。

主人公、源末景みなもとみかげの憧れの人は、同室の藤野薔とうのつばみ。薔の兄で、重度のシスコンである藤野中将とうのよしまさとはライバル関係にある。そんなある日、薔がある男子寮生に惚れちゃった疑惑が起こり――？ ちょい百合風味だけど基本ノーマル。女の子版「ここは・リーン・ッド」みたいなのが書きたいのですw

1・コードネーム「G」との遭遇

奴が現れるのは、いつだって唐突だ。

式部学園付属学生寮、源氏寮は 梅 棟と 梨 棟が男子寮、
桐 棟が女子寮の男女混合寮である。

各棟の一階には一つずつ、「談話室」と呼ばれる広さ十二畳ほどの和室があり、月一回の棟会議で使用される時以外は寮生達の溜まり場となっていた。

そこを多く利用する寮生の趣味嗜好が反映されて、筋トレアイテムやスポーツ器具がごろごろ並んでいたり、アイドルやアニメキャラのポスターが張り巡らされていたり、と棟によって多少のカラーの違いはあるが、初期装備として、テレビが二台、ゲーム機数種類、そして大量の本や漫画が置いてあるところはどこも共通である。

その時、談話室にいたのは私、源末景と、雲居明雁、六条紗妃の1年生3人。

時刻は五時を過ぎたところか。

入寮してから一週間が経過し、新学期はつい先日始まったばかり。にもかかわらず早速大量の宿題や予習を課せられて、私たちは帰宅後、げんなりしつつもそれぞれの課題に取り組んでいた。

「イラクがバクダッド。イランがテヘラン。アフガニスタンがカブール……これいい、覚えやすいわ。アフガニスタンは布をカブル」ソファアに腰掛けてプリントを見つめる明雁は、世界の国と首都の名前を暗記する、という課題をやっているらしい。短いポニーテールを傾けながら、活発そうな面立ちをしかめて、ぼそぼそと唸っている。

「あはは、なにこの国。ブータンだって。変な名前！」いきなり爆笑しだす明雁。

「首都名はティンブー……だめだ、この語感、ツボった！ ブータ

ンにティンプーって、どこまでふざけてんだこの国は！！」

いや、ふざけてるのはおまえだ。ブータンの人に謝れ。ブータンは国民総生産（GNP）ではなく、国民総幸福（GHP）を重視する立派な国だぞ。

「まあ、確かに地名っておもしろいですわよね。エロマンガ島、クサイ島、オナラスカ、キンタマーニ、チンコ川にボイン川、チンポー湖って湖もあります」

古典の原文をノートに写していた紗妃が、緩やかにウェーブした長い髪を左耳にかけながら、すらすらと世界の珍名を並べあげる……
「ておい、綺麗な顔してなんて単語を口にしてんだ。

「日本にも色々ありますわよ。京都には元悪王子町って妄想をそそる町がありますし、愛媛の土居中^{どいなか}、香川の昼寝山、なんかも好きですわ。鼻毛、股毛、金玉落としての谷……」

だから下ネタはやめい。絶世の美貌が台無しだぞ！

心の中で突っ込みつつ、英語の長文読解に集中しようと手元の辞書に視線を戻した時だった。

ボトツ

何かが、天井から落ちてきた。私の英語のテキストのちょうど中央に。

黒くて、平たくて、凶悪なまでに光っている。長い触角の。コードネーム『G』。

「ぎゃあああああ」

「きゃー！　きゃー！　きゃー！」

「ひいつ、やだ、こっちこないでー！！」

こたつの上で予測不可能な曲線を描きながら恐ろしいスピードで這い回り、極めつけに奴は。

「ぎゃー飛んだああああ」

心臓に悪すぎる。

壁に着地して一瞬で本棚の背後へ潜り込み、しばしの静寂。

私たち3人は息を飲んで様子を伺っていたが、視界の端、また別

の方向に、さつと動く影を捉え、戦慄した。まさか、と顔を見合わせた瞬間。本棚の後ろと、そこから少し離れたテレビの後ろから、同時にく奴らゝが飛び出してきた。

「……2匹……!!」

「どうしよどうしよどうしたらいい?」

「殺虫剤は!?!」

不意に、扉が開き、誰かが入ってきた。

「どうしたの?」

桐101号室、おほつきあや朧月彩夜先輩だ。

基本化粧気のない女子寮生が多い中、珍しくいつもばつちりメイクして、ヘアスタイルも垢抜けた大人っぽい印象の3年生。

「ゴツゴツゴツゴ……」

「ああ、ゴキブリか」

彩夜先輩は、床に落ちていた雑誌を丸めると、悠然と黒い悪魔に接近する。

ソファーに足をかけ、リーチの届く位置まで来ると、バシッと一撃で、しとめた。私が言うのもなんだが、サイボーグのような無表情。

「もう一匹いるんです」という明雁の言葉に、頷いて、こちらも正確無比に必殺。

はあくつとようやく人心地ついた私たちに、彩夜先輩は一変して艶やかな笑顔を見せ、言った。

「大丈夫、ゴキブリなんてすぐ見慣れるわよ。あ、ムカデが出たら、ガムテープで挟むのがオススメ」

2・ああ憧れの舊様

築54年の源氏寮は、住居としてはなかなかシビアな環境に置かれている。

鉄筋コンクリート製で、夏は暑く、冬は寒い。（当然エアコンなんて文明の利器はない。）

周りは草木が茫々で、蚊やムカデ、ゴキブリ等の害虫も生息しやすい。

風呂はないので、近所の銭湯を利用することになっている。

共同のトイレと炊事場はもとより、建物全体、ズボラな寮生が多いので衛生的にも決して良好とは言えない……そう美しいものでもないので詳しい描写は省くが。（それでも曲がりなりにも女子の暮らす桐棟は、まだ相当マシな方らしい。）

そんな寮であつても、そこでの生活は、私にとっては幸福に満ちたかけがえないものであつた。

「大変だつたねえ……」

明雁の語る先ほどのダブルGショック話に耳を傾けていた藤野ふじのつぼみ菫様は、のんびりした調子でそう相槌を打たれた。

只今、女子寮生数名（新入生4人＋先輩たち）で連れ立っていった銭湯からの帰途にある。

ちよつとでこぼこした石畳の歩道。

数日前まではそれは見事に咲き誇っていた街路樹のソメイヨシノは完全に散ってしまったが、道沿いに面した庭々の生垣やその上から、レンギョウや紫木蓮、里桜などがところどころ顔を出し、季節の趣を味わわせてくれる。

さて、右手に洗面器を、左手に衣類等の詰まった手提げ袋をお持ちの菫様は、頬をかすかに上気させ、お召しになった赤い半纏も相まっていつも以上に愛らしく、情緒あふれるご風情にあらせられた。吹き抜けた夜風に、ショートボブの柔らかそうな猫っ毛がさらりと

揺れる。お風呂上りなのに、髪質が細いためもう大方乾いてしまったようだった。

この御方と日々を共に過ごせるのだ。一体この生活になんの不平を唱えようか。

9年前に恐ろしい野良犬から救っていただいて以来、蕾様は私の憧れの御方であった。

今春に寮で運命の再会を果たし、しかも部屋は同じ桐202号室！その事実が判明した瞬間の私の脳内は、まさに盆と正月とクリスマスとハロウィンと夏休みと冬休みと春休みとGWと天皇誕生日と体育の日と（以下略）が一度に來たような華やぎだった。

蕾様は9年前と変わらず、気さくで明るい、素直な御方であられた。

温和で優しく、世間一般で言うところの癒し系の雰囲気もありながら、それでいて正義感も強く、芯が通っていらつしやる。

たまに反応がずれてることもあるが（「蕾は天然よね」と明雁が言っていた）、蕾様のおっとりとしたペースは私には非常に心地いいものであった。テンションの高すぎる相手は苦手である。

「未景さん。また蕾さんに見とれてますの？」

「いとしきものを愛でて何が悪い」

からかう様な紗妃の言葉にそっけなく返したところ、前を歩いていた彩夜先輩が「ねえねえ」と振り返った。

「蕾と未景って同室のままで大丈夫なの？」

「……何か問題が？」

彩夜先輩、あっけらかんと

「寝込み襲ったりしない？」

「しません！！」

ななななななんということをして！ 蕾様っ。蕾さまはどう思われるのだ！？

焦ってご様子を伺うと、蕾様は道向こうにあった雑貨屋に注目な

さつており、今の会話は耳に入ってらっしゃらなかったようだ。ほつ。

「こんな時間まで開いてるんだ」

夜7時半。閑静な住宅街で、そこだけ照明が輝き、目立っていた。

「こんなところに雑貨屋さん、ても珍しい感じ」

「だよ。けど、あそこはわりと可愛いものいっぱいあるわよ」

彩夜先輩の説明に、蕾様はへえ、と目を輝かされる。

「私、ちよつと見ていこうかな」

「そ？　じゃ、店内狭いし、私たちは先帰るね」

先輩方と別れ、1年生4人でこじんまりした、ややエキゾチックな雰囲気のある店内に足を踏み入れた。イランイランの香の薫りがほんのりと漂い、本物の樹木や葉で作られたようなオブジェがあちこちに飾られているのが一風変わっているが、統一感がありセンスがいい。

「あ、このネックス可愛い」

「はい、蕾様によくお似合いです」

「ほんと？」

につこりと微笑まれる蕾様。背後に花畑の幻が見える。

ああ、私は今、全世界の祝福を一身に浴びている……！

「蕾」

かすかにビブラートのかかった低音に、興奮がすつと冷めた。

「お兄ちゃん！」

「外から姿が見えたからな。銭湯の帰りか？」

片手に洗面器を提げて現れたのは藤野中将。とうのよしまさ

私の直感が告げる、終生のライバルだ。

蕾様の年子の兄なのだが、生まれ月の妙（中將が4月生まれで蕾様が3月生まれ）で同学年。とはいえ、とてもそうは見えない。

高校に進学したばかりだというのに180は優に超えた長身と、決してマツチヨではないががっしりした体つきも、実年齢より老けて見える要因となっているが、なによりこいつには妙な存在感とい

うか、周囲への威圧感のようなものがある。その辺も気に食わない。
「出たよ、恋敵」

「兄妹か女同士か……どちらに転んでもヤバさは互角なんて、あまりに見事な均衡ですわ」

後ろで、明雁と紗妃がこそそと勝手なことを言っている。それをキツと睨んでいるうちに、中將は蕾様のすぐ傍まで接近してきた。ええい、あっちへいけ、しっしっ。

「これ、どう思う？」とネックレスを見せる蕾様に「悪くないんじゃないか？」と応える中將……顔が近いぞ！ かゝ、ムカムカ。

「じゃ、思いきって買っちゃおっかな」

「蕾」

「何？」

「入学祝だ」

中將は蕾様の御手からネックレスを奪うと、レジへ向かっていった。嬉しそうな蕾様……蕾様の笑顔は何にも代えがたいが、それがあの男の行動にあるというのはなんとも癪に障る。

怨念を込めてガンをつけると、あちらもギロリと睨み返してきた。バチバチと火花が散る中（↑イメージ）この険悪な雰囲気の原因であられる張本人は、無邪気に「このブレスレットもいい感じだね」とウィンドウを覗かれている。

「蕾様、でしたら私にも御入学祝に購入させてください」

「えっ駄目だよ、そんな」

「負けるものか、と切り出したのに慌てて辞退されてしまった。がいん。」

「しかしバイトも決まりましたし」

「それは生活費に充てるんでしょ？もらえないよ」

「はあ……」

「気持ちだけですごく嬉しいよ。ありがとう」

天使の笑顔を返され、じーん感極まったが……やはり、兄妹の親しさには遠く及ばないのか、と思い知らされて悲しかった。

「あつ、お兄ちゃん待つてよ」

出口へと歩き出した中將に小走りで追いつき、「へへっ」と言つて腕に絡まる蕾様。中將は、「ほら」と蕾様の頭に軽く、買ったばかりの商品の袋を乗せる。相変わらぬ無表情ながら、よく観察すると、愛しいものを見守るような慈愛の眼差しを蕾様に注いでいた。くそ～～～！！

この2人と一緒にいると、常にこの親密な空気を見せ付けられ、負けっぱなしの気分になった。

とはいえ、そんな私にも一つだけ、奴に優越感を抱けるところがあった。

3・シャレにならない三角関係！？

「あゝ、やっぱり爽×栄はいいなあ」

頬を染め、くうくうと悶えて満面の笑みを浮かべる蕾様。手には彼女のバイブル的漫画『バスケの王子様』……の、同人誌がある。中將は彼女のこの趣味を知らない。

「男の人に知られるのは恥ずかしい」そうで、女子寮生にはもはや公認の蕾様の同人好きも、男子寮生には誰一人伝わっていなかった。ふはははは、どうだ中將！おまえの知らない蕾様の一面を私は知っているのだ！

「もう来週の爽×栄オンリー超楽しみっ」

「朝九時出発でよろしかつたでしょうか？」

「うんっ」

「何、未景も行くの、同人誌即売会」

寝転んでテレビを見ていた明雁が、スナックを食べる手を止めて意外そうにこちらを見た。本を読んでいた紗妃や、ゲームをしていた彩夜先輩も視線を向けてくる。

……銭湯から帰寮後、皆でなんとなく談話室に集まり、だべっていた。

「未景も同人誌ハマりだったの？」

「いえ、そういうわけではないのですが」

「未景さんは、蕾さんと出かけられれば行き先はどちらでもよろしいんですよ」

紗妃にズバツと図星をさされ、言葉が出ない。あはは、と彩夜先輩が笑う。

「なんだそつか。あつ、蕾。〇〇さんの新刊出てたら買ってきて」

「彩夜先輩も〇〇さん好きなんですか？ 私也大ファンなんで絶対ゲットしてきますよ」

「ああ、爽×栄は別に興味ないけど、私もあの人の作風は好きかな」

「明雁ちゃん」

この場にいる自分以外の皆が皆、普通に同人誌の存在を知り、かつ程度の差はあれ読んだことがあるというのは、私にはかなりの驚きであった。紗妃に言わせれば「まあ、このくらいは嗜みですわ」ということだが……。

どうも寮にはマニアックな人間が集まりやすいのではないか、と思う。

私は蕾様たちの会話に参加できるほどその世界に精通していないため、テレビに目をやった。映画のコマーシャルが流れている。

「おっ、話題作」

彩夜先輩が、ぱりつとポテチをかじりながら、声を上げた。

「そうなのですか？」

「うん、だってね……どうぞー」

トントンというノックの音で、先輩の台詞は途切れた。蕾様は読みかけの同人誌を慌てて本棚へ突っ込まれる。この談話室のドアをわざわざノックしたりするのは、男子寮生だけだからだ。

果たして、扉の向こうから覗いた顔は、明雁の彼氏の山里夕霧やまぐちゆづきりであつた。

高校生男子としてはかなり綺麗な白い肌に、さらさらの黒髪。好感度抜群の爽やかな笑みと共に、問う。

「夜遅くにごめん。明雁、いるかな」

「はい、なになに」

「ちよつといい？」

「おっけー」

ぺこりと軽く頭を下げ、ドアを閉める。礼儀正しい男だ。

ほおっ、と誰かがため息をついた。……蕾様？

蕾様はなぜかぼんやりと、夕霧たちの消えた戸口を見つめていた

……心なしか、頬が赤い。

「蕾、どうかした？」

彩夜先輩に呼びかけられ、はっと我に返ったように「はい!？」

と高い声で答えたが、見る見る真つ赤に染まっていく。

「あっ、あのっ、私、ちよっとやらなきやいけないこと思い出したんで、失礼しますっ」

あからさまに動揺しながら、ばたばたと談話室を去っていく蕾様を、残された私たちは沈黙して見送った。

「……なんだろね」

「なんなのですか？」

「相手がいるとわかっていても」

ぼつりと呟く紗妃に、彩夜先輩と一緒にばつと振り向く。

「恋する気持ちに歯止めはきかない……でしょうか」

思考が一時、停止する。

——恋いい!!???

「おーっと、蕾ってば、夕霧のこと好きになっちゃったの？」

「先ほどの蕾さんの態度をみたら、そう考えるのが妥当ではありませんこと？」

「そっそっそっ……」

驚愕に、噛みまくってしまう。

「そんなはずがあるわけがない。夕霧は明雁と付き合っているではないか。人の恋人を横取りなどあのお優しい蕾様が」

「横取りするつもりは無くても、惹かれてしまうことはありますでしょ？」

冷静な紗妃の言葉に言い返せない。

「確かにそう考えると、納得いくことがあったのよね」

彩夜先輩までとんでもないことを言い出す。

「一昨日くらいの夜だけど、蕾が洗顔した後、『もうやめなきや。明雁ちゃんにも顔向けできなくなっちゃうよ』って独り言いつてたの。意味深過ぎて炊事場入れなかったわよ、私」

ぐわーん、と顎が外れそうなほどショックを受けた。表向きはいつもより少々目を見開いているだけなのだが。

「未景さんは？」

矛先を向けられたが、混乱しているので何を尋ねられているのかわからない。

「いつもあれだけ蕾さんと一緒にいらっしやるんですもの。何かお気づきになられたことはございませんでした？」

詳しく言ってもらって、ようやく質問の意図を理解し、必死で思い返してみる。えーと、えーと……。

「……なんだか、心あらずといったご様子になることが多かった気がする……夕霧が近くにいた時には」

「心あらずっていうと？」

「ぼーっとされている、というか、話しかけてもすぐにはお耳に届かなかったり」

談話室がしばし静寂に包まれた。

「ほぼ確定、ですわね」

「このカップリングは、ちょっとシャレになんないわね……」

しんみりする二人。しかし私はどうしても信じられず、胸のうちで叫び続けていた。

そんな馬鹿なそんな馬鹿なそんな馬鹿な——！！

4・不本意な共同戦線

その後も夕霧^{ゆうきり}への蓄^{つばみ}様の奇妙な態度は続いた。

食堂では桐棟^{きり}新入生4人プラスαで食事をしていると夕霧^{ゆうきり}や中將^{よしまさ}がやってくるか、その逆に明雁^{あかり}たちが寄つていくというパターンとなり、彼らと一緒に食えることが多い。そんな状況において、蓄様は食事中も夕霧とは目を合わせないようにしたり、たまに合うとかすかに赤面したりといった調子なのだ。

それは決してあからさまなものではなく、注意してみなければわからない程度であったが、私にはバレバレである。

私は一体どうすればいいのだろう？

私にとつて一番大切なのは、間違ひなく蓄様であり、どんなことが起こっても私は蓄様の味方だ。

それはゆるぎなく絶対であつたが、かといってすでに相手のいる男との恋愛を応援するのはさすがに気が引けるし、その「相手」の雲居^{くもい}明雁^{あかり}は、同じ桐棟の一年生だ。（奔放な言動の明雁は本来苦手な人種であるが、なぜか彼女はそういう意識はもたせなかった。）
そもそも、あの二人の仲を引き裂ける見込みは皆無に思われる。

明雁に聞いた話によると、二人の親同士は仲が悪く、交際は長年禁止されていたらしい。しかし、それでも初恋の五歳の頃から十年間、密かに逢瀬を重ね、夕霧が式部学園を受験するために上洛するにあたり、明雁が自分も式部に行くと言明。中学時代の明雁の成績では無理だと高をくくった親が、合格したら二人の仲を認めると証言したため、明雁は夕霧のサポートの下必死に勉強して奇跡の成績二百人抜きの末、これまた奇跡の補欠入学を勝ち取った……というのだ。

現実に見えていても、明雁は夕霧の傍では本当に嬉しそうに生き生きしているし、夕霧も明雁に対しては、いつもの万人に注がれる笑顔とは一線を画した、なんとも言えない満ち足りた瞳で応えるので

ある。はっきり言って、無敵のラブラブっぷりだ。

どうしたら蕾様が傷つかずにすむか、すでに惚れてしまっているのなら、傷つかないなど不可能だが、それならば一番ダメージを少なくするにはどうしたらよいのか……。

考えども考えども解決策は浮かばず、このところ食事も満足に咽喉を通らない。

……話してくだされば、いいのに。

せめて苦しみを分かち合えれば、もどかしさは変わらなくても、蕾様も少しは楽になられはしないか。

片思い疑惑の発覚5日後、火曜日の夕食後、部屋に蕾様と二人きりになると、私は思い切って切り出してみた。

「蕾様は、山里夕霧に懸想されているのですか？」

前置きも何も無くの唐突な質問に、蕾様はぽかんとお口を半開きにされていたが、すぐにかゝつと真っ赤になって、慌てたように激しく首をお振りになる。

「ないないそんなこと絶対無い、誤解だよ！」

「しかし……」

「ごめん、そんな風に見えちゃうんだ？ 違うよゝ断じて違うの」「ならばいったいどうしたのでしょうか？ ここ数日の蕾様の様子は……」

蕾様は「うゝ私の馬鹿馬鹿」と悶えてから、ごめんね、と謝ってこられる。

「だから未景ちゃん、ここのところ元気なかったんだね。心配させちゃって……私のせいで、本当、ごめん」

「そんな、私のことなど、どうでもいいのです」

少し怒った口調で言ったのに、「どうでもよくないよ！」ともつと怒ったような声で返される。

「未景ちゃんは優しくすぎて、自分の体や心の辛いところはほつちやうところがあるでしょ？ それは駄目だよ。逆に回りのが辛くなっちゃうんだか……ら……」

言いながら、蕾様は少しずつしまった、という表情になり、「……
て今回は私のせいなのに怒る権利ないよね。ううごめんなさい」
とまた謝ってこられる。

「蕾様……」

「心配してくれてありがとう。すごく嬉しいよ。でも本当に全然そんなことないから」

困ったような笑顔で力強く否定されると、私はもはや何も聞けなくなってしまうた……。

私に相談できないなら……。

顔が強張るのを感じながら、階段を一步一步踏みしめ、下りる。

目的の部屋に到着し、ノックすると、奴と同室の住人である夕霧が出てきた。

「あれ、源さん、どうしたの？」

「藤野中將はいるか」

「今さっき出て行ったところだよ。行き先はごめん、わからないな。あいつはケータイも持ってないし……伝言なら聞くけど」

「ならばよい。失礼した」

玄関を入ってすぐ横、事務室受付の右隣の、名札スペースを確認する。

どうやら寮からは出てはいないようだった。

食堂、図書室、平庵郷、各談話室……あちこち見て回るが、中將の姿は無い。

あきらめて桐棟に戻る途中、彩夜先輩とすれ違う。ダメモトできいてみたら、

「知らないけど、中將なら屋上が好きらしいって聞いたことあるわよ」

果たして梨棟屋上に、藤野中將は佇んでいた。

息を切らしてやってきた私にちらりと視線を投げたが、すぐに興味なさそうに目をそらし、外を見下ろす。

「……搜したぞ」

呼吸を整えながら言うと、ゆっくりとこちらに顔を向けた。

やや意外そうに眉を上げている……当然だろう。機会はいくらでもあったのに、今まで一度たりとも互いに話しかけたことなど無かったのだから。

「話がある……蕾様のことで」

中將の集中が一気にこちらに向かったのを感じた。それでも何も言わない。

とことん無口な男だと呆れながら、私は話し出す。

「最近、おかしいと思わないか？」

「……落ち着きが無いとは、思う」

愛想のかけらも無い、硬い声。

「かと思えば、上の空だったり」

「なぜだと思う？」

「さあな」

「山里夕霧に、横恋慕しているのではないだろうか」

中將は無言で私を凝視する。

ピクリとも表情を変えず、ありえない、と呟いた。

「山里は雲居くもいと付き合ってるじゃないか。あの蕾が……」

「そのつもりは無くても、惹かれてしまうこともある」

ん？ こんな感じの会話、前もあったか？ いや、そんなことはどうでもいい。

なんでこいつはこんなに冷静なんだ、と苛立ちながら、彩夜先輩の証言や、部屋での蕾様のご様子をまくし立てた。

「蕾様は先ほど私が部屋を出る間際、小さく呟かれたのだ。『気をつけなきゃ』と」

それは本来、蕾様にしか聞こえない筈の本当に微かな囁きであられた。しかし、蕾様へのレーダーだけは、異常に発達している自負

がある私の聴覚は、しつかりその音を捉えたのだった。

「蕾様は、誰も傷つけまいと、苦しみをご自分の胸にだけ閉じ込めようとしている……あんなに蕾様が苦しまれているのに、なぜおまえは気づかない!?」

あんなに蕾様に慕われているくせに……。

感情が昂り、うつすらと目に涙さえ浮かんできて、慌ててぬぐった。ええい、涙腺だけはゆるいこの身が疎ましい!

「とにかく、おまえになら蕾様もお話になられるかもしれない。さりげなく様子を伺ってほしい」

「……わかった。気をつけておく」

中將の返事を確認すると、私はすぐさま「邪魔したな」と背を向けた。

あろうことか、絶対弱みを見せたくない相手に涙を見せてしまった。くそつ。

悔恨でいっぱいになりつつ、立ち去ろうとしたら、「源」と名を呼ばれた。

「礼を言う」

「……蕾様のためだからな」

言うことは言った。さつさとこいつから離れたい。

足早に歩を進める背後で、なんとなく、あいつが、笑った気配がした。あゝ、ム力つく。

5・尾行でヤキモキ

「やったー！ 全キャラの武勲マックス達成！」

歓声を上げた彩夜先輩に、談話室にいた全員の視線が集まる。

「『三国BASARA？』で！？ 先輩、それどんだけやったんですか？」

「数百時間……？ いや、最高値のアイテムコンプ目指してたら、いつの間にか溜まりまくっちゃって」

明雁の質問に、あははと笑ってVサインをする彩夜先輩。信じられん。

『三国BASARA？』は中国の歴史小説『三国志』に登場する武将を操作して、天下統一を狙うアクションゲームである。私も一時期プレイしていたので、「武勲マックス」がどれだけ労力の要ることかはわかった。

しかし、ゲームをクリアしさえすれば満足する一般人の私としては、感嘆すべきか呆れるべきか、よくわからない状況である。

「彩夜ちゃん、去年は梅棟談話室に入り浸りだったものね」

読書をしていた浮舟いずみ先輩が、おっとり微笑して説明する。梅棟談話室は「ゲームセンター」の異名を持つ、寮内屈指のゲーム部屋だ。

「よくゲームしてるとは思ってたけど、彩夜先輩、ゲーマーだったのか……」

蕾様がほおつと息をつかれた。彼女は感嘆派らしい。一方、ゲームはまったく興味無しの紗妃は「暇ですわね……」と呆れる派だ。

「蕾様も『三国BASARA？』をプレイされるのですか？」

「ずっと前にね。孫策と周瑜だけはエンディング見たよ。この二人、知ってる？」

「ゲームのキャラとしてならば存じておりますが。親友同士でしたでしょうか？」

「ズバリ！知る人ぞ知る『三国志』きつての人気美形カップルなんだよ。同い年の幼馴染で、互いに誰よりも信頼し合っていた呉の若き猛将たち……うう、萌えるよ」

歴史上の人物までホモ扱いか、と軽く眩暈を覚えなくても良かったが、頬を上気させて嬉しそうにお語りになる蕾様の、元気なご様子に安心した。

一昨日真意をお尋ねして以降、蕾様のおかしな態度は格段に見られなくなった。はじめは私を気遣って無理をしているのではないかと心配したが、どうもそんな感じはしない。

もしや中将よしまさに話して気が楽になったのか、とも考えたが、奴も何の相談も受けていないという。

吹っ切れたのではないかと、私は希望的な観測を抱いていた。

「彩夜先輩、手合わせしてください。私、格ゲーなら結構何でもいけますから」

「えー、明雁、熱が入ってくるとコントローラー壊しちゃいそうだしなあ」

「ひどっ、壊したこと無いですよ！……2回しか」

冗談ですよー、と明るく笑う明雁を見る限り、彼女には蕾様の想いは気づかれていないようであるし、事態は一件落着か……と大きく胸をなでおろした時。

トントン

ノックの後、扉を開けたのは、藤野中将であった。ぐるりと談話室を見回し、私の姿を確認すると、

みなもと
「源、来い」

それだけ言って、さっさと去ろうとする。

「待てっ」

不本意ながら、急ぎ足で追う。

扉を閉める直前、目を丸くしてこちらを見つめる一同の顔が目に入った。

桐棟屋上で、人影が無いのを確認してから、中將はいつもどおりの無表情で話し出した。

「まずいことになった」

「なにが」

「蕾と山里が文化部なのは知ってるな」

寮生は寮内の仕事を分担した四つの組織、炊事部、庶務部、厚生部、文化部のいずれかに所属することになっていた。文化部とは、新歓や寮祭などの寮内イベントを計画・実行する、いわゆるお祭り係である。

私が頷いたのを見て、中將は言葉を繋げる。

「今週土曜に計画されている大文字登山の頂上バーベキューの買出しに、明日の放課後、蕾と山里が行くことになったらしい。しかも、におつ ふみや仁王文哉、浮舟いずみの二人と一緒にだ」

「……蕾様と夕霧が？　しかもあの傍らに人無きがごとく何処でも彼処でもいちやつきまくる寮内名物バカップルと！？」

最悪だ……。

くらりと眩暈を覚え、思わず手摺に寄りかかった。仁王先輩といずみ先輩は、単品ならそれぞれ魅力的で人望もあるよい先輩だと思うのだが、それがセットになるや始末の終えないトラブルメーカーとなった。

一度相手の姿を確認するや、周りのことにとんと気の回らなくなる二人なのだ。

せっかく夕霧のことを吹っ切れそうになっても、あの二人の猛烈なラブラブ振りを間近で見せ付けられたら……。

「つけよう」

私の決断に、中將は僅かに身じろぎした。

「つけたところでどうする？」

「どうにもできない。だが、私の知らないところで蕾様が傷つけられるなんて嫌なんだ！」

つい、叫ぶような大声になってしまった。それだけで十分恥なのに、想定外のことについてっかり紅潮までしてしまい、ますます気まずい。

「別におまえと一緒に行動するつもりはない。私が勝手にそうさせてもらうだけだ」

「待て」

立ち去りかけたところで、急に手をつかまれた。

不覚にもドキッとしたのは、こいつの冷たい普段の印象からは想像できないほど、その手が熱かったからだ。

中將は、掠れているのに、なぜか響くあの低音で、言った。

「俺も行く」

翌日。学校が終わってすぐ、私と中將は寮の駐輪場に直行した。

事前に蕾様から、五時半に自転車で出発すると聞き出していた。

木の生い茂った中、身を潜めていると、まず、時間の10分前に山里夕霧が現れ、まもなく浮舟いずみ先輩がやってきた。とりあえず、夕霧&蕾様のツーショットは避けられた、と胸をなでおろしたが、5分後にやってこられた蕾様を見て、度肝を抜かした。

蕾様は白のプリントTに膝丈スカート、というシンプルないでたちだったのだが、そのスカートが、今夕霧の着ているシャツと同じストライプ柄なのである。

「まずいことになったな」

「何が？」

「蕾様と夕霧、まるでパールックではないか！」

強烈なダメージを受ける私に、中將はフツ、と憎らしく口元を歪めた。

「神経質になりすぎだろ。あれのどこがパールックだ。日本人と韓国人くらいには違っぞ」

……それって違っのか？

よくわからない説明に眉をひそめているうちに、仁王文哉先輩が現れた。時間ぴったりだ。

「いずみ」

と手を振りながら、猛スピードで走ってくる。いきなり恋人しか眼中に無い。

「ごめんな、ミーティングがあるって、サッカー部の奴らに捕まってる……振り切るのに時間とられちゃった」

「まあ、ミーティングは行かなくて良いんですか？」

「いいっていいって。いずみとのデートの方が1億2700万倍は重要だ」

「文哉くん……」

「いずみ……」

「えーかげんにしなさいっ」

バシイイ

いきなり蕾様にハリセンで叩かれ、仁王先輩は「ってえ」と頭を押さえた。

「何すんだよ藤野っ。でもってなんでいきなり関西弁!？」

「そこんとはお気になさらず」。彩夜先輩から言われたんです。

『先輩達が暴走し始めたなら何言っても届かないから、これで思いきりはたきなさい』って……」

「あいつ……俺のことなんだと思ってんだ」

仁王先輩は不満そうに唸っていたが、氣をとり直して「いくか」と自転車を取りに向かう。

茂みから様子を伺っていた私は、正気に返ったバカップル二人にほっと息をついた。出だしから胃が痛い。

頼むから蕾様を刺激するようなことはしないでくれ、と祈るばかりだったが、仁王先輩のチャリの後ろにいずみ先輩が横向きに座るのを見て、またショックを受ける。

「『耳を澄ませば』じゃないか!青春街道まっしぐらか!」

「いや、だから気にしすぎだろう」

中將が何か言ってる気もしたが、それどころじゃない。

あいつら……あとでシメる。

この時ばかりは彼らが先輩であることも忘れ、本気で殺意を覚えただぞ、私は。

本日はバーベキュー器具を買うということで、仁王先輩たちは繁華街にある大型生活雑貨店にやってきた。目的のものは早々にゲットしたが、4人はインテリア、食器、玩具、リラックス用品など何でも並ぶ店内を見て回ることにしたようだ。

「いずみ、何買ったんだ？」

「さっきのマブカップを2つ。おそろいで……使ってもらえますか？」

「いずみ」

「何度目やねん！」

バシィィィ

2人がいちやつきだすと蕾様（@謎の関西弁）がすかさずハリセン攻撃をかますので、ムードもへったくれも無く時間は経過していく。

「なんだよ藤野っ、もう用事は済んだじゃねーか」

「寮に持ち帰るまで油断すると言われてきたので。にしても先輩たちもこりませんね」

結局計11回仁王先輩をどついた後、帰途につく次第となった。

店からでる4人を追おうと階段の陰から飛び出した途端、急にぐらりと立ちくらみを覚え、平衡感覚を無くした。

危うく階段から落ちるところを、中將に支えられる。

「……すまない」

不本意ながら礼を言うと、中將は小さく「馬鹿」と呟いた。

「何っ……」

「心配なのはわかるけどな、食事くらいはしっかり摂れ。どうせ夜

「もろくに眠れてないんだろう」

ギロリと鋭い眼光で威圧し、言いたいことだけ言って中将はさっさと歩き出す。

反論できなかった悔しさに、私は拳を握ったが……そういえば、なぜ、こいつはそんなことわかるのだ？

……もしかして。

こいつも、同じ状態なのか……？

ようやく帰るかと思いきや、4人は喫茶店に入っていく。

寄り道しないでとつと帰れ！と心の中で散々罵詈雑言を浴びせるが、どうしようもないか。4人の姿は見えるがあちらからは気づかれにくい、程よく離れた席に腰を下ろす。

「声は……聞こえないな」

ああ、もどかしい。

「あまり近づくと気づかれる」

と中将が冷静なものにも、イライラする。

「少しは落ち着け。蓄の様子も全く普段どおりだし、何事も無く終わりそうじゃないか」

「今のところそうだが、最後まで気は……」

カッとなって無意識に動かした肘が水の入ったグラスを直撃し、中身が机の上にぶちまけられた。グラスはすーっと転がり床に落下

……

「どわっ」

しかけたが、机から落ちた一瞬で何とか私はキャッチした。ふうーっと深い安堵のため息をついたが、中将の冷やかな視線に気づき、また赤面する羽目になる。

なぜこいつの前でばかり失態を晒すのだ……。

運命と、何より間抜けな自分を呪いながらおしぼりで机を拭いていると、くくつと中将の肩が揺れた。な、なんだ？

呆然とする私の前で、中將はしばし下を向いて小さく震えている。手で隠れて顔は見えないが、これは……

「笑うなっ」

私が声を荒げてても（勿論蕾様たちには届かないよう小声でだが）、中將はくつくつくつ……と小さく笑い続ける。

「~~~~~!!」

「……おかしな奴だな、おまえは」

一頻り笑ったらようやく落ち着いたのか、顔を上げ、ぼつりと言った。まだ微かに口元がいつもより緩み、目尻には涙まで溜まっている。

「周囲には無関心、といった様子なのに、蕾のこととなると急にあたふたしてポーカーフェイスも形無しだ」

おまえこそ人のこと言えるのか、と私が口を開こうとした時。

「あれー。珍しいツーショットね」

明るくよく通る声が、店内に響いた。

ギョツとして振り返ると、すぐ傍らに彩夜先輩が、友人らしき少女と共に立っていた。

「あつ彩夜！ てめー、よくも藤野にいらんこと吹き込みやがったな！？」

仁王先輩が近寄ってきてこちらにも気づき、「ん？ 藤野中將と源末景？」と首を傾げる。蕾様たちも集まってきた。

「お兄ちゃん！ 末景ちゃん！ どうしてここに？」

まずい、と内心焦りまくったが、いつも通り事務的な口調で答える。

「観たい映画があつたので、それを鑑賞してきた帰りなのです」

「お兄ちゃんと？ 末景ちゃんが？」

目を丸くされる蕾様。仁王先輩がおもしろそうに声を上げる。

「おまえら付き合ってたのか？」

「そついうわけではありませんが。藤野も興味があるというので、付き合ってもらったのです。な？」

目配せすると、中將も面倒くさそうに小さく頷いた。今度は彩夜先輩が尋ねてくる。

「なんの映画観てきたの？」

「――『仮面舞踏会』です」

咄嗟にこの間CMで知ったタイトルを口にすると、彩夜先輩はぽかんと口を開けた。夕霧も啞然としており、蕾様といずれ先輩はなぜかお顔を赤くしてらっしゃった。

仁王先輩だけが楽しそうにピューと口笛を吹き、「で、どうだった？」などと聞いてくる。

「思ったより大したことありませんでした」

いい加減に答えると、おおっとその場にどよめきが走った。

「藤野は？」

「俺は十分楽しめました」

私への反応が異常だったからわざと逆を言ってみたのだろうが、中將の答えにも皆が再びざわめく。なんなんだ……。

わけがわからないまま、仁王先輩が「そうか」邪魔して悪かったな。じゃ、俺たちは引き上げるよ」と皆をまとめて出て行き、彩夜先輩も「友達と一緒にだから」とやや頬を上気させつつ離れていってしまった。

「……………藤野。おまえ、『仮面舞踏会』、どんな映画か知っているか？」

「知らん」

「私もタイトルしか知らんのだ」

「……………まあ、いいんじゃないか？ どうでも」

そういつて、中將はまたいつもの仏頂面で、オーダーしたコーヒーを飲み干す。

悪い予感はないでもなかったが、今は蕾様たちの行動を見守るほうが重要だった。私は、領収書を持って席を立った。

6・シャレにならないカップリング

結局何事も無く買い出しは終わった。

蕾様は終始仁王先輩をはたくのに一生懸命であったから、夕霧とただならぬ雰囲気になることも無かった。寮につくとほつとすると同時に、どつと疲れが襲ってきた。

蕾様が部屋に戻られてすぐ私が帰宅というのも、奇妙に思われる可能性があるし、談話室にでも行くか……。

蕾様が桐202の扉を閉めたのを確認し、一階へ向かう。談話室の扉にあと数歩、という時点で、ばたん！ とすごい勢いで、あちらからドアが開かれた。

「明雁……？」

いつに無く真剣な表情で出てきた明雁は、私に気づくと「蕾はどこ？」と強張った声で問う。

「何事だ？」

こちらの疑問には答えず、ずんずんと階段を上がっていく明雁。後から出てきた紗妃が、代わりに説明した。

「あんまり明雁さんが呑気なものですから、思わず忠告してしまいましたわ。『私だったら自分の恋人が、彼に好意を抱いている女性と出かけたりしたら、心配でいてもたってもいられませんが』って。そうしたら、本人に確かめてくるって電光石火……」

「なんてことを！」

慌てて部屋へ直行した。あの明雁の怪力で殴られでもしたら、蕾様は……！

その時は自分が命をかけてでもお守りしなければ、と固い決意で扉を開ける。勉強机の前に座っていた蕾様は、突然入ってきた私に驚いたような顔をしていらしたが、まだご無事で、私はひとまずほつとする。

蕾様の傍に立っていた明雁も、乱入者に何事かと視線を投げてき

たが、すぐに蕾様の方に向き直り、ズバリと聞いた。

「蕾、あんた夕霧に惚れてるの？」

ギャラリーも全く気にしない、核心を突いた質問だ。ギョツとしたように蕾様が立ち上がった。

「明雁ちゃん！？」

「夕霧の前じゃあんたの態度がおかしいって、紗妃が。彩夜先輩は、あんたが私に悪いとか独り言いつてるのを聞いたらしいし……」

蕾様はしばらく口をパクパクさせていらしたが、やがて脱力したように椅子に腰を下ろすと、べたべたと机に突っ伏された。

「ちがうよ！そんなんじゃないの！」

「じゃ、なんでなの！？」

「うう……」

「蕾！」

明雁が語気を強めると、蕾様はふうふうと一回ため息を漏らし、観念したように「わかった、話すよ」とはつきり宣言した。

「実はね……夕霧君、私の理想の攻なの」

「……はい？」

明雁の目が点になった。私も同様だ。ちなみに 攻 とはボーイズ・ラブにおける専門用語で、なんというか、その……男同士の恋愛における、男役のことである。（対義語は 受 ）

「かつこよくて頭がよくて誠実で周りからの信望も厚くて温厚で……でも夜は鬼畜 ていうのがね、私の好きな 攻 のタイプなのよ。だからつい夕霧君を見るとどうしても想像力が刺激されて……」

あまりの予想の斜め上に行く答えに、言葉の出ない明雁と私。

「夕霧君、うちのお兄ちゃんとすごく仲がいいじゃない？ 同じ部屋だしさ。お兄ちゃんは、実は照れ屋で不器用でストイックで、どう考えても絶対的 受 タイプでしょ！？ 理想の 攻 と究極の 受 の相部屋なんてもう妄想止まらないじゃない。もう勘弁してくって感じだよ」

ふらっと倒れ掛かった私を、いつの間にか来ていた紗妃が「しっ

かりなさって」と抱きとめてくれた。蕾様はもはや説明というよりは、ようやくためていた胸のう치를吐き出せるとばかりに瞳を輝かせ、嬉々として喋り続ける。

「彼女のいる人でこんなこと考えちゃうなんて駄目だ、明雁ちゃんに申し訳ないって何度も思ってたけど、どうしても想像しちゃうってさくでも未景ちゃんに誤解されちゃったりしたから、こりゃ本気で我慢しなきゃって気をつけるようにしてたんだけど辛かったよ。昨日なんてお兄ちゃんちよつと寝不足っぱかったから、ああ、夜にいたい何が……って」

「人の彼氏をネタにして遊ぶなあああー！！！」
この時の明雁の怒声は、遙か梅棟まで轟き渡ったそうである……。

「明雁ちゃん、機嫌直してよ」

夕食を摂りに食堂へ通う道すがら、むすつとした明雁に蕾様は謝り続ける。

「よかったじゃありませんか。蕾さんが片思いしていたよりずっとマシでしょう？」

紗妃が助け舟を出すと、それまで沈黙していた明雁も「まあ……そうね」とようやく表情を和らげた。

「確かにね。笑い話で済んでよかったわ」

「ありがとう」と嬉しそうに明雁の腕に絡まる蕾様。私も、（自分が悩んでいたのは馬鹿みたいではあったが）紗妃の言うとおり、勘違いでよかった、としみじみ思う。ただ、一つ気になることがあった。

「紗妃。もし本当に蕾様が夕霧に懸想されていたら、どう始末をつける気だったのだ？ 明雁に直接問い詰めさせるなど、泥沼に陥るしかなかったのではないか？」

問いかけたら、紗妃はほほほ、と小さく笑って答えた。

「それは私も始めは、蕾さんが夕霧さんに思いを寄せているのでは

と疑いましたけど、蕾さんのご様子を観察していたら、違うだろうことはわかってきましたわ。未景さんみかげはすっかり思い込まれていたようですけど……でも、恋ではないことはわかって、なぜかまではわかりませんでした。

未景さんの性格上、きつと蕾さんに尋ねるだろうと思いましたけど、未景さんのご様子を見る限り、未景さんにも理由は話さなかったようですから、私が尋ねても同じ結果でしょう。

そこで、明雁さんを挑発したのです。明雁さんに問い詰められれば、蕾さんも誤解を解くために、必ず本当のことを話してくださると思いましたから」

啞然とする私たちの前で、紗妃は「大成功ですわ」と晴れやかな笑顔を見せた。……恐ろしい女だ。

食堂に到着すると、「六条さん」「六条さん」と紗妃の美貌に惑わされた男どもがわらわらと寄ってきた。

そのまま、私たち、というか、紗妃の座ろうとする方へゲルマン民族の大移動よろしくぞろぞろついてくるのはいつものことで、通常はそれがうざくて仕方ないのだが……今日はなんだか同情したぞ、奴らに。

カウンターのところに中将よしまさの姿を見つけた。

蕾様たちに先に食べていてくださいと告げてから、私はそちらに小走りで駆け寄る。

懸念が消えたことをなるべく早く知らせてやろうと思い、「少しだけ時間をくれ」と食堂から出てすぐのところにある、梅・梨棟の間の中庭へ、中将を引っ張っていった。

この後、食堂でとんでもない邪推が繰り広げられることになるうとは、まだ、つゆ知らず……。

中庭で、全て自分の勘違いであった、と告げると、中将は「そうか」とだけ答え、軽く頷いた。蕾様のご様子がおかしかった本当の

理由も聞いてこない。

もし聞かれても、「蕾様は夕霧とおまえのラブシーンを妄想しておられたのだ」などと言えるわけが無いのだが。

最愛の妹に「究極の 受」とまで宣言されるなんて……こればかりは、こいつに一抔の同情を感じざるを得ない。

「怒らないのか？」

早とちりに巻き込んでしまい、どれだけ罵られても仕方ないと覚悟を決めていたので、中將のこの反応は拍子抜けでさえあった。

だが、中將はやや眉をひそめながら、「なぜだ？」と逆に聞いてきた。

「蕾のことを思ってくれてたんだろう？」

……こいつは実は結構いい奴なのかもしれない、と、思ってしまった。一瞬。私としたことが。

「それに」

中將は、くつ、と口元を歪める。

「おまえのあたふたする様も、なかなか愉快だったしな」

前 言 撤 回 ！！

私は即座に、自分の浅薄さを深く呪うことになったわけだ。そして確信を強めた。

やはりこいつは天敵だ。宿敵だ。生涯かけてのライバルだ——と。

さつさと蕾様の御許へ戻ろう、と食堂の扉を数センチほど開いたとき、中から明雁の声が耳に飛び込んできた。

「未景と中將、最近なんか仲いいよね」

……はあ？

あまりに心外なコメントに、私の体は扉に手をかけたまま固まったが、隙間から見える紗妃は、こくこく頷いて同意を示した。

「よく、お互いの姿を探してますわね」

確かにここ数日は、蕾様の事があって、そうだったかもしれないが、ちよつと待て！

「六条さん、俺、あの二人が梨棟屋上で二人きりのところ見ました」
「今日なんて、二人して駐輪場の茂みに入っていくところを見ましたよ」

紗妃のおとり巻き連中も、間違つてはいないが、思いつきり誤解を招くような目撃談を披露する。

「そーいや源、ここんとこやつれてる気がしたけど」

「恋煩いつてヤツ？」

「やーめーてーくーれー。絶対有り得ないから！勘弁してくれ！
全身鳥肌で泣きそうになっている私の横で、影が動いた。

「……藤野^{Suit}。どこへ行く」

「面倒くさそうだから、一度部屋に戻る」

私の隣で、同じように立ち聞きしていた中将は、それだけ言うと、さつさと梨棟へ帰っていった。……ておい、この状況をこのままにしていくなか？

一人取り残された私が焦っている間に、食堂では、明雁たちのそばに「何の話だ」と仁王先輩が近寄っていた。また厄介そうな男が……。

「いや、源末景と藤野中将の噂」

「あゝ、あいつらか。今日二人でデートしてたぞ。映画観に。な、藤野、山里」

余計なことを……！

仁王先輩に話題を振られた蕾様と夕霧は、少し困ったように「はあ……」と返事を返す。

どよめく周りの反応を楽しむように、仁王先輩は、「しかも！」と胸をそらした。

「聞いて驚け。その映画つてのがなんと、あの『仮面舞踏会』！」
「えっ。あのちよつと過激な性描写が話題の15禁映画!？」

~~~~~  
……………！（絶句）

「まさかそこまで関係が進んでいたなんて、驚きですわ」

「中將も未景も、見かけによらずやるじゃない」

「あいつらが、今年度の新カップル第一号だな！」

高らかに仁王先輩が断言した瞬間、私は思わず扉を全開して絶叫していた。

「嘘だあああああああああああああああああああああ」

その後、私は必死で慣れぬ長台詞での釈明に追われることとなった。

よりによつて中将とだなんて、と落ち込む私は、後から明雁や紗妃に「いやゝ。未景のあんな必死な様子、初めてみたよ」「親近感アップでしたわ」などとかかわれ、更に落ち込んだ。

「真っ赤になって一生懸命で、可愛かったよ。未景ちゃん」

蕾様はそう、フォローしてくださったが、つまり傍目にも私のパニックぶりは明らかであつたらしい。とんだ赤恥をさらしたわけだ。私の過剰な反応がおもしろかつたのか、あれ以来、誤解と承知の上で一部の寮生から「彼氏元氣?」「中將によろしく!」などと時折ひやかされるようになった。

蕾様への愛の試練の一つだとしても、悪夢である……。ガクリ。

< 終 >

## 6・シャレにならないカップリング（後書き）

お粗末さまでございました

源氏寮を舞台にしたお話はシリーズとしていくつが存在するので、よろしければ他の作品にも目を通していただけたらこの上ない幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8231o/>

---

源氏＜寮＞物語 ～少女(おとめ)の章

2010年11月15日08時10分発行